２０２４ 千葉県公立高校入試 国語

第四問

【解説】

（１）文法問題。本文の「はっきり」の品詞は副詞。

ア・「やがて」の品詞は副詞のため正答。

イ・「美しい」の品詞は形容詞のため不適。

ウ・「ような」の品詞は助動詞のため不適。

エ・「確実に」の品詞は形容動詞のため不適。

（２）第二、第三段落で「人種の坩堝」について説明されている。「るつぼ」自体は実験機器であることから「人種の坩堝」は比喩表現であり、九～十行目に「多様な人種や民族を溶かしてしまう器」が「ミードが生きたシカゴそのものの姿」であり「都市社会学の原点であるシカゴを語る時、この言葉は象徴的に使われる」と示されている。

この説明のもと、第三段落で「語る言葉も生活習慣も文化も異なる人々が同じ街でくらすとして」発生する「社会問題」をどう捉え、解決するかという「実践的な問題関心のもと、社会学部が出来た」、そして「シカゴ大学で社会学の知的実践の基本が創造された」とまとめられている。

以上のことから、本文では「人種の坩堝」の定義（＝シカゴが多様な人種と民族が大量に存在すること）と、そのようなシカゴの環境下では様々な社会問題が発生するために社会学が創られたということが説明されている。

ア・「今や世界中に存在感を誇示」は不適。本文にそのような記述はない。

イ・「個別の問題を調査する余裕がないほど、人口が過密である」は不適。「人口が過密」という記載はなく、様々な問題が発生する中で解決のために社会学が醸成された旨が記載されている。

ウ・正答。

エ・「言葉や生活習慣などの壁がなくなり、皆が協力しあって生きていること」は不適。都市社会学の発展の結果、このような状況になっているかもしれないが、本文中に記載はないため誤り。

（３）本文での説明内容をまとめた空欄部を埋める問題。

傍線部は「～でしょうか。」と疑問形になっているため、解答の根拠は傍線部後にあると判断できる。直後に、「ミードはこの問いに対して、**他者の態度を内面化することによる社会化と「Ｉ」と「ｍｅ」のダイナミクスによる自己の形成**」と続いているため、この内容をまとめれば解答となる。

第五段落で**「Ｉ」と「ｍｅ」のダイナミクス**に関する記述が抽象的に示され、第六段落

冒頭で「少し考えればわかるのですが」と具体化の展開がなされている。設問の文章はこの具体化した内容をまとめる問題であるから、第六段落以降が問三における解答の根拠になりうるとわかる。

第六段落は、「人間は他者と出会うこと」から避けることはできず、様々な人間との関わり合いによって成長し、社会化し、老いていくと書かれている。さらに続く第七段落で「他者の態度を引き受け、期待される役割をその場で判断し、適切に役割を演じ、上手に他者との関係を維持していくことは、とても重要」と結ばれる。以上のことから、「人間は他者との出会いと相互関係の中で、他者から求められる自己を判断しその要求に応えながら成長し続ける」という要約が考えられる。設問の空欄に合わせると、

Ⅰ・ア（他者）　Ⅱ・ア（他者）　Ⅲ・エ（社会構成員としての自己）となる。

（4）傍線部前に「他者と出会うこと」の例が列挙されている。

・両親のような最も親密な家族
・友人や部活仲間
・同僚
・同じイベントの参加者
・街ですれ違う人々
・介護者
・生きているうちに出会わない圧倒的多数の他者

これらの事柄に合致する選択肢を選ぶ。

ア・「様々な役割を互いに共有しあう他者や、その場に応じて役割を演じ分けていく他者」は該当する他者の例がないため不適。

イ・正答。「長い時間を共有する他者」はイベントやコンサートの参加者を指し、「短い時間、あるいはほとんど関わることのない他者」はすれ違う人や生きているうちに出会わない人々を指している。

ウ・「信頼関係」や「関係の構築」という記述は本文にないため不適。

エ・「苦手意識を持つような他者」は該当する他者の例がないため不適。友人や同僚をそれに該当させることは本文に記述がないためできない。

オ・「自己の生き方に影響を与える他者」は自らの介護をしてくれる人を指し、「精神的な結びつきがあまりないような他者」は生きているうちに出会わない他者を指す。

（5）（a）

本文と、政治や社会に参加する「主体」（＝自己）を形成するうえで「批判する力」が必要としている追加の文章を踏まえて解答する問題。

「批判する力」について筆者は、「自己の持つ負の側面から背くことなく、今後のために好転させることを考えて何かを生み出す力」と定義している。空欄Ⅰにおいては「批判す

る力を持たない場合」の記述内容であり、批判する力を持たないときの結果としてどのような存在になってしまうかを解答とする。本文に目を向けると第八段落に、「ミードの「自己」論で、私がとても興味深く思うのは、「I」という「自己」が持つ側面です。（中略）社会を生き、自分を生きていくために、私たちはつねに新しい何かを生み出す可能性を秘めています。「社会性」を守ること以上に、私たちが「自己」を作り上げ、「自己」を生きるうえで、新しい何かを創造するその力が大切だと唱えるミードの考えは、確実に伝わってきます。」とあり、追加文章での主張と合致しているため、この段落が解答の根拠となることが分かる。

「社会性を守るよりも人間が新しい何かを創造する力（＝批判する力）の方が大切」とまとめられているから、批判する力がないと、「社会性を守る」だけの存在になってしまう。したがって解答は「エ」となる。

（5）（b）

空欄部は、批判する力を持つことで可能になることを記述する。まず主語を考えていく。追加の文章は、「政治や社会に参加する主体を作り上げるうえで欠かせない能力の一つが批判する力である」ということが論旨であるため、批判する力を持つことで、政治や社会に参加する主体（＝自己）を作り上げることが出来る。また、本文と照らし合わせると、第九段落で「「自己」は「社会性」を盛るためだけの器ではありません。それ（＝自己）は「社会性」をどのように受容するか、その検討ができる力を持った人間存在の重要な側面なのです。またそれ（＝自己）は「社会性」の持つ様々な問題や歪みをいったん受容し、そのうえでより気持ちいい「社会性」を実現するために（中略）新たな形として他者へと示していける力を持った「生きていくプロセス」にもなり得るのです。」とある。（a）で批判する力は「何かを新しい何か創造する力」と定義づけがあったことから、第九段落三行目以降の「またそれは」以降の、「より良い社会性の実現のために、いったん受容して中身を修正変革しあらたな形として他者に示す」ことは批判する力であるとわかる。以上をまとめると、「政治や社会に参加する自己をつくりあげ、他者へと示していく」という内容が解答になる。字数指定に注意して解答する。

（6）

ア・「「I」と「me」を比較することで社会の問題点を明らかにしている」は不適。比較はしていない。

イ・正答。

ウ・「後半は（中略）「me」の重要性を説いている」は不適。筆者は「I」（＝「自己」）の観点を強調している。

エ・「創造性・創発性に欠いた日本人を問題視している」は不適。そのような記述はない。

第五問

（1）発言の理由を答える問題。傍線部前にわかる事実は子連れの女が若柿を買いに来たものの売られてないことを知り落胆する様子のみであるから、傍線部後に解答の根拠があるとわかる。傍線部から七行後に「女の差し迫った顔つきが気になった新吉」という表現と、その後の「もう三年も～」の発言から「病気の父親ために柿を食べさせてあげたい」という内容が解答であるとわかる。

ア・「柿の実を買うことが、貧しい中で味わえる唯一のぜいたく」は不適。そのような記述はない。

イ・「小さいこどもに、柿の実を食べさせたい」は不適。父親に食べさせたいと言っている。

ウ・正答。

エ・「柿の実を買うことで、鮨を安く手に入れることが出来ると思った。」は不適。そのような記述はない。

（2）傍線部での新吉の心情を答える問題。

父親の状況を鑑みて柿を渡したものの、身なりの貧しそうな女からお金を渡された場面。傍線部直前に「新吉は受け取るかどうかを、つかの間思案した。その戸惑い」とあり、「その」の指す内容は「お金を受け取るかどうか」であるから、戸惑いの内容は「お金を受け取って良いのか」ということになる。また、そのように考えた理由は女と子どもの「身なりが貧しそう」という表現にあることから、「父親も病気で貧しい家族からお金を受け取るかどうか戸惑った」という解答になる。

ア・「職人として精進を重ねて作り上げた鮨を売ろうか迷っている」は不適。そのような記述はない。

イ・正答。

ウ・「時季外れの柿は高価なので、女のお金では足りず、さらに代金を要求しようか迷っている」は不適。そのような記述はない。

エ・「女からのお金は柿を譲るには多すぎるので、竹をもう一本渡すか迷っている」は不適。お金が余計である旨の記述はあるものの、竹を渡すか迷っているわけではない。

（3）女の様子を説明する問題。（2）で新吉は貧しい家族からお金を受け取ることに戸惑ったが、「足りないかもしれませんが、受け取ってください」という発言では強く差し出した、澄んだ目が光ったという女の様子に関する記述があることから、支払いに対する強い意志が分かる。また設問の文章が「どれほど貧しい暮らしだとしても」という形になっているため、支払いを当然として行おうとする選択肢が最も適当であると考えられる。

ア・「心の充足に結びつく純粋さ」は不適。傍線部は、自分に対しての様子ではなく新吉に向く（支払いをしようとする）様子である。
イ・「良好な関係を築く」は不適。そのような様子は読み取れない。
ウ・「父親の情に報いることになる、という感謝の念」は不適。支払いに対する意思を解答の根拠とする方がより適当。
エ・正答。

（4）傍線部の新吉の様子を答える問題。（3）で女の支払いの意思を見て受け取ることとしたが、金額が余計であったためその分を鮨代をとして払う提案を受けた。また、女は鮨が好きであり、新吉の作る鮨がおいしいことを知っていた。それを受けての傍線部であるから、新吉は「女に鮨を作るよう求められ意気に感じている。」ことが解答の根拠であると分かる。
ア・正答。
イ・「今日はつけないと決めていた柿を渡してしまって、自分自身をひどく責めていたが」は不適。そのような記述はない。
ウ・「柿だけを求めてくる女に対して未熟さを感じていたが」は不適。そのような記述はない。
エ・「厚かましくも柿を添え物のように鮨を求める女に対して腹立ちを覚えていた」は不適。そのような記述はない。

（5）傍線部の内容を説明する問題。
女に鮨と柿を渡して受け取った百文差しは傍線部の状態であり、その直後に「どうみても、昨日今日に銭売りから買った差しではなさそうだ。何かの時のためにずっと蓄えてきた差しにちげえねえ…」とあるから、解答の根拠はこの部分となる。
ア・「父親の好物である若柿を変える時期に備えて、事前に父親から預かっていた貨幣だということ」は不適。そのような記述はない。
イ・正答。
ウ・「父親の看病に追われていたので、使う暇がなくそのまま古くなってしまった」は不適。何かの時のために蓄えていた。
エ・「高い身分ではないので、銭売りから買うことのできるのは安価で汚れた細縄だけだということ」は不適。そのような記述はない。

（6）（a）
Ⅰ・新吉が、女が来たその日に柿を売らなかった理由を答える問題。
本文冒頭のリード文に、「安売りをしないという親方の教えを忠実に守った」や（4）でおいしいと噂の立っていた新吉の鮨の話を聞いて意気に思った点などから、新吉自身の

鮨職人としてのこだわりが判断できる。文字数制限を考えると、「鮨職人としての矜持」や「仕事への思い」などが挙げられる。

Ⅱ・他者にもまっすぐ向き合う人物である表現を本文中から探す問題。女に対して発言している中で、金銭を受け取ることを了承した場面で実際の金額の内訳を話し、「姐さんにほどこしをするわけじゃねえんだ」とある。貧しい家族という状況を認識しながらも、「施しをかけるわけではない」と女に対して向き合っている場面であり、また字数制限も満たしているため、「ほどこしをするわけじゃねえんだ」が正答となる。

（6）（b）傍線の理由を記述する問題。この問題においても（a）Ⅱと同様に、女に対して「施しをする（＝情けをかける）わけではない」と述べていることから新吉が代金を受け取らなかった理由を考えることが出来る。会話の中で「仕事だけでなく、他者にもまっすぐ向き合う人物」としているので、情けをかけることが、女に対して良いことではないと思っているとまとめられる。貧しいことを理由にして情けをかけてしまうと、女に対して見下していることと同義であるからである。以上から「貧しいことを理由にして情けをかけることは、かえって相手を見下すことになる」とまとめられる。

第六問

【現代語訳】

欲の深い住職が、同宿を連れて囉斎に出かけた。家人が僧にお布施をつつみ子どもに持たせ住職の前に据えたところ、住職は百文のつつみと思えた。その後、家の主人が二百文つつんだようなものをもって、同宿の前に据えた。住職は「不審だ、順番を前後間違えたのであろう」と思い、寺に帰って同宿に向かって、「先ほどのお布施は、施主が取り違えたと思われる。俺のものをお前に渡し、お前のものをこちらへ寄こしなさい」と言った。同宿は戸惑う様子をしていると、住職はいっそう欲しいと思い、自分の分を投げ出し、その二百文のつつみを取り上げてみたところ、ろうそくが二丁あった。

（1）みえたり

（2）お布施の渡され方が、上位の僧である自分は百文と思われるものであったのに対して、下位の僧である同宿には二百文に思えたので不審に思った。

ア・「経を読む前に渡すはずの布施を後にした」は不適。そのような記述はない。

イ・「つつみ方の間違いから、布施の向きが逆になった」は不適。そのような記述はない。

ウ・「童子が、長老と同宿の前へ布施を置いてしまったこと」は不適。長老へは童子が、同宿へは亭主が渡している。

エ・正答。

（3）傍線部の理由を説明する問題。

同宿が困惑したのは、住職が自分には少ない額のお布施であったと勘違いし、お布施を交換するよう（強制的して）指示してきたためである。

ア・「同宿は自分がもらった貴重なろうそくを譲れないと思うけれど」は不適。そのような記述はない。

イ・「施主にやり直しを命じようとしていること」は不適。そのような記述はない。

ウ・正答。

エ・「どちらの布施も最後には寺のものになるのに、面倒で全く意味のない交換を長老が無理強いしていること。」は不適。そのような記述はない。

（4）傍線部の主語になるのは長老（ウ）である。

（5）（a）返り点の問題。返り点のルールに注意して答える。

ア・一二点が連続しているため不適。

イ・正答。

ウ・一二点が連続しているため不適。

Ucaroute.
あなたのルートが、ここにある。

エ・一二点の順番が異なるため不適。

（6）（b）会話の空欄部に入る表現を記述する問題。欲に関連して今回の本文を踏まえて解答する。空欄部は物語の結末部分を示しているため、その点をまとめる。

同宿の分と自分の分を交換しようとして、無理やり取り上げてみたらろうそく二丁であり、結果自分の百文を失った旨を字数制限に注意して記載すれば良い。